
とある魔術の黄昏使い -twairait master-

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の黄昏使い - twairait master -

【Nコード】

N9835T

【作者名】

凧

【あらすじ】

学園都市のLEVEL5の一人、心理掌握こと暮咲 愛はある日スキルアウトに追われていた。

「誰……?」

そこで彼女は、一人の少年と、運命的な出会いをした。少年と少女が出会ったとき、物語は始まる！

第一話（前書き）

皆さんはじめまして風でございます。

処女作なので、至らぬ点多いと思いますが見ていってください。

感想、指摘お待ちしております。

第一話

心理掌握 side

「はあ．．．．．はあ．．．．．」

私は、学舎の園の路地裏を走っていた。

なんで私がこんな所を全力疾走しているかというと

「なんでスキルアウトが学舎の園でたむろってんのよー！」

ということ、寮の門限ギリギリになって急いでいたら、寮の付近にスキルアウトがいて

目が合った瞬間いきなり追いかけて、只今絶賛逃亡中。

んっ、戦えばいいだって？ 確かに私は学園都市に七人しかいない

LEVEL5だけど

私の能力って使うと後々面倒になるのよ。

「行き止まり！？」

周りはスキルアウト達に囲まれてしまった。

（とりあえず．．．脅してみるか。）

「私を追いかけてどういうつもり！私は学園都市に七人しかいないLEVEL5のひとつ」

「心理掌握だろ？」

「！．．．．．なんで私のことを知っているの？」

「外のお偉いさんからの命令でな、学園都市のLEVEL5を一人連れて来いって言われたんだよ。」

リーダーらしき男が喋り始めた。

「七人のうち、誰でもいいから連れて来いって言われたんだけどよお、さすがにお前以外の奴を連れてくるって言ったって無理があんだよ。」

まさか．．．．．コイツー！

「お前、ケンカに向いていないだろ？」

「むぐつ!?!」

「だからおとなしく付いてきやがれ!!!」

私は、相手の腕を必死にふりほどこうとしたけれど、体に力が入らない。

- - - もう私、駄目なのかな - - -

(誰か、助けて!)

スパアーーーーーン!

私がそう願った瞬間、スキルアウトの人たちは倒れていた。そのかわりに立っていたのは・・・。

「誰・・・・・・?」

長い髪と、死神のような服を纏った人だった。

第二話「黄昏使い・トワイライトマスター」(前書き)

続きます。

どつぞ。

第二話「黄昏使い・トワイライトマスター」

「あなた．．．誰？」

心理掌握は、目の前にいる謎の人物に訪ねた。
顔は中性的で、年は中学生ぐらいに見える。

「えっ？」

どんなことでも見通すかのような、深紅の瞳で心理掌握を見つめながら、歩み寄ってきた。

そして去り際に、耳元で呟いた。

「黄昏使い・トワイライトマスター．．．。」

「ちよつ、ちよつと待って！」

振り返ったらそこにはもう、あの人物は居なかった。

side 暮咲 愛

一週間後

「はあ．．．．。」

私、心理掌握こと、暮咲 愛はいつものように学校の通学路を歩いていた。

何でいきなり溜息なのか？ 何故かというと、ここ一週間、

あの黄昏使いについての情報を、

書庫で調べたり暗部に入っている友達に聞いたりしたけれども、何も収穫は無かった。

それに、国語の論文だったり、ペルシャ絨毯を編んだり、イギリスの展覧会に出す絵画を描いたりとか、中々ハードなスケジュールだった。

これが本当に、中学生のスケジュールなのかと、疑問を持つ人もい

るだろうけど

これが私の通っている常盤台中学の普通なのだ。

「はぁ．．．．．。」

もう一度溜息をしつつも、私は、自分の教室に向かった。

side out

side 風見 類

「次．．．．．風見！」

「はい。」

俺、風見 類は、只今授業中である。授業内容は、目を隠して相手が隠しているカードの絵を当てたり

手を使わず、卵をその場に立たせるなど、馬鹿げた内容だ。

これで本当に能力を使えるようになるのか？

「卵を立たせるなんてムリです。」

・当たり前だ・

「はぁ、お前は見た目もいいし、成績優秀、スポーツ万能、なのになんで能力がかいかしいんだだろうな。」

「知りませんよ。」

見た目はいいとよく周りから言われるけど、そのせいで昔、よくイジメられてたしなぁ。

「まあ、地道に努力していればいつかは報われる。努力を怠るなよ。」

・

「はい。」

俺は、努力したって能力は絶対開花しないと思う。

だって《能力は一人に一つなのだから》

俺、風見 類は、この世界でたった一つの能力を使う能力者。

・黄昏使い・《トワイライトマスター》な

のだから。

第二話「黄昏使い・トワイライトマスター」(後書き)

やっと主人公が本格登場！

次は多分、主人公とヒロインの設定をかくと思います。

そしてなによりも．．．．．眠い。

感想、ご指摘をお待ちしております。

人物設定（前書き）

主人公とヒロインについてです。
ネタバレを含みます。
それでもいいならどうぞ。

人物設定

名前 風見 類

年齢 14歳 身長 169? 体重 56kg

能力 LEVEL0 黄昏使い《トワイライトマスター》

柵川中学校2年 髪の色は黒色 瞳の色は赤

髪は腰の高さぐらい、普段は、後ろで一つ縛りにしている。

趣味は、体を動かすこと、読書。

親に捨てられ瀕死状態の所を警備員に保護された。

それからは、通っている学校の寮で一人暮らし

普段は誰にでも優しいが、怒ると非常に怖い（学園統括理事を一人怪我させたとか）

小学校の頃いじめられていた時、助けてくれた少女を探しているが、何も手がかりがない。

能力について

原石 本人は、あまり能力のことを知られたくないためあまり人前で能力を使わない。

黄昏使い《トワイライトマスター》 光と闇の力を使う。

武器は、加工された金属棒の先に光の刃を形成して使う。

形状は、剣×2、鎌、両手剣、短剣

ちなみに第一話で戦った時は鎌

相手に対して光の柱を飛ばす。

光を纏い高速移動する。

- 最大出力 -

光の柱の出力が2倍になる。

上から光の柱を無数に落とす。

特殊なフィールドを形成して相手を孤立させる。（キンハ？FMの口。サス戦のフィールドの感じ）

名前 暮咲 愛

年齢 13歳 身長 158? 体重 46kg

能力 LEVEL5 《心理掌握》

常盤台中学2年 髪の色は茶色 髪はポニーテール 瞳の色は青色
アメリカ人と日本人のハーフ

学園都市で7人しかいないLEVEL5の一人 序列第5位
体育以外なら成績優秀。

学校では、憧れのお姉さまとして有名。

以外と料理が苦手。

趣味は読書と人の心を読むこと

人前ではかなり優しいが、知り合いになると口調が変わる。

暗部に友人がいたり、友好関係の幅は広い。

能力について

心理掌握 相手の心を読んだり相手を操ることができる

相手を操ることができるが自分だけの現実が強い人には効かない。

相手の心を読むことができる。

- 精神崩壊 -

相手のトラウマを大きくして精神崩壊にさせることができるが、使えるタイミングが限定されており、自分にもリスクが伴う。

人物設定（後書き）

こんなもんですね。

主人公完全に口○サス！

ヒロインの能力がチートのような気がする・・・。。。

感想、アドバイス、ご指摘があったらどうぞお待ちしております。

第三話「黄昏使いVS電撃使い」(前書き)

深夜から書いてると疲れますね。

これ書いたら寝よ。

続きです、どうぞ。

第三話「黄昏使いVS電撃使い」

「さつてと、夕飯どうすっかな。」

学校が終わり、俺は夕飯のメニューを考えながら下校していた。

「まちなさいよ！っこのツンツン頭〜！」

「どわ〜！んなこと言いながら電撃ぶっ放してくるやつを待つわけあるかー！」

ツンツンした頭が特徴的な学生を、名門常盤台の女子が電撃を放ちながら追いかけてまわっていた。

（あのツンツン頭の人、可哀そうだから助けてやるか……………。）

そう思いながら、俺は現場へと身乗り出した。

「やっと思いついたわよ、このツンツン頭。」

「ひいつ！」

「その人、困ってるみたいだからやめてあげたら？」

「！っ関係ないでしょ、っていうか誰あんた？」

俺が彼女に話しかけたら、彼女はキリツと睨みつけてきた。　　おー
怖い怖い。

「誰かはともかく、とにかくやめてあげたら？困ってるし。」

「うつうるさい！だったら、アンタが私と勝負しなさいよ！」

「はっ？」

「だ・か・ら！アンタが私と勝負しなさいっていつてんのよー！」

この子はどこの戦闘狂だよ！戦えればだれでもいいのか！？

（はぁ……………しょうがないか。）

「いいよ、その勝負買った。」

「あー、上条さんのことわすれてませんか？」

「あつ、アンタいたんだ。」

「ヒドイ！上条さんのHPはもう0なのですよー！」

「すみません、まだ名前を聞いていませんでした。　あなた達、名前

は？」

「俺は上条 当麻、気軽に当麻って呼んでくれ。」

「私がかみじょっ、じゃなかった、御坂 美琴よ。」

「御坂 美琴．．．！っ常盤台の超電磁砲か！？」

面倒な子を相手にしてしまった．．．．。

「どうっ、怖気づいた？」

「いや、上等だよ。」

まあ、売られたケンカを買っちゃったからしかたがない、やるか．．．。

「ここじゃあ危ないから、場所を移動しましょうか？」

「いや、必要ないよ。」

「えっ、どういう．．．．．！？」

俺と彼女の視界が一度ブラックアウトし、そして周りの風景が変わった。

これが黄昏使い《トワイライトマスター》の能力の一つ。

「ここどこ？．．．．．って何したのよあんた！？」

周りは暗闇で自分と彼女の足元には、ガラスのような足場が広がっていた。

「これが俺の能力ので形成された空間だから、心配いらないよ。」

「そっそう．．．．．。」

彼女はいま起こったことが、俺の能力のせいだと知って、安堵したようだ。

．．．．．そうだ、まだ名前乗ってなかったな。

「改めて自己紹介するよ、俺の名前は風見 類、能力名．．．．．黄昏使い《トワイライトマスター》。」

「とっ黄昏使いってあの、世界をいつでも光にでも闇にでもできるって言う都市伝説の！？」

彼女は黄昏使いと聞いてかなり驚いているようだ。

「まあそういうこと、じゃあお喋りはこれくらいにして。」

「そうね、ここなら何も無いし、全力で暴れることができそうねッ

！」

ズガァン！

「おっと。」

彼女は、電撃の槍をこちらに向けてとばしてきた。おれはそれを右へ飛んでで避けた。

避けた方向を予測するかのように電撃の槍を飛ばしてきた。

「そんなによけてばかりじゃ、私には勝てないわよ！噂の黄昏使いはその程度なのっ！」

むっ、その言葉は心外だ、しかたがない少し早いけど、終わらせるか……。

俺は、鞆の中から特殊加工した短めの金属棒を二本出し、その先に光の刃を形成した。

「やっと本気って訳ね、じゃあこっちも本気でいくわよ！」

すると彼女は、スカートのポケットから一枚のコインをとり出した。

超電磁砲か……。

ピン……。ズガァン！！！！

「流石にこの超電磁砲はよけられないでしょっ！？」

「残念だったな……。避けられて。」

彼女は自分の必殺を避けられてかなり驚いているようだった。そしていま彼女の喉元には俺の光の刃が突き立てられている。

「うっ嘘……、どうやって避けたのよ！？」

「まあ、それも俺の能力ってこと。」

「っ！？」

「勝負ありだね。」

俺がそういうと、周りは元の景色に戻っていた。

「はあっ、認めるわ、アンタの勝ちね。」

「あのお、上条さんは状況がまったく理解できないのでせうが……。」

「まあ、簡単に言っていると俺と彼女が戦って、俺が勝ったということ。」
「おっ、お前勝ったのか、あの御坂に！」

「うん。」

「すげえなお前！ということは、お前もLEVEL5なのか！」

「いやLEVEL0だよ。」

「えっ。」

しばしの沈黙、そして……。

「ええ……………!!!!」

二人の驚きの声が、学園都市に響き渡った。

第三話「黄昏使いVS電撃使い」（後書き）

類VS御坂、どうでしたか？

やっぱり戦闘描写って難しいですね。

感想、ご指摘、アドバイスをお待ちしております。

第四話「再会」(前書き)

部活疲れた〜〜。

帰ってきてすぐに投稿したのでかなり駄文かもしれませんが
どうぞ。

第四話「再会」

side 風見 類

「はぁ．．．．．。」

あの後、自分の能力についての説明を2時間以上していた。それに御坂さんに、

『アンタ、女の子なんだからその男みたいな口調やめたら?』とか言われた。

確かに自分もこの容姿のことはよく知ってるけど

さすがに女の子に間違えられるなんて思ってもいなかった。

男としての恥だ! (涙)

(そうだ、夕飯どうしようか考えてたんだった。)

そんなことを考えていたら寮についていた。

寮の階段を登っていくと、自分の部屋の隣の部屋からポニーテールの女の子が出ていくのが見えた。

「ん? あの子、確か．．．．．。」

その女の子は、昨夜助けた女の子だった。

side 暮咲 愛

「今日はありがと、それじゃまたね!」

私は、黄昏使いに会ったという友達から話を聞きに来ていた。

聞いた話によると、夜の8時ぐらいに学園都市のどこかに現れるらしい。

(門限とつくに過ぎてるのに、探せるわけじゃないじゃない。)

常盤台中学の門限は7時、門限を過ぎるとあの鬼寮監にヘッドロックを食らいかねない。

「コロッと出てきてくれないかな。」

「何がコロッとでてきてくれないかだって?」

「うわぁっ!?!」

いきなり後ろから話しかけられた。驚いて後ろを向いた。
そこには、深紅の瞳と長い黒髪を後ろで縛っている、あの時助けてくれた人が立っていた。

第四話「再会」(後書き)

今回は短かったです。

来週は修学旅行なので更新できないかもしれません。

バスレクのクイズでしょう．．．．．。

感想、アドバイス、ご指摘お待ちしております。

第五話「物語のハジマリ」（前書き）

すみません。

昨日投稿するはずが、データが消えてしまって遅れましたがどうぞ。

第五話「物語のハジマリ」

「ホントにコロツと出て来ちゃった．．．．．」

愛は、この一週間どんなに必死に探しても見つけれなかった黄昏使いに

こんなにあっさりと会えたことに啞然としていた。

「んっ？俺のこと探してたの？」

「ねっねえ！？あなた名前は？LEVELいくつ？なんで助けてくれたの？男、女？」

「そ、そんなに一気に質問されても困るんだけど．．．．．」

「ゴ、ゴメン．．．．．」

愛は類に迷惑をかけたと思い、頭を下げた。

「謝らなくてもいいのに、それより質問の答えだけど、名前は風見類、柵川中学二年、あの時散歩してて、追われてる君を見つけたから助けた。あ、ちなみに男だから。」

「あ、あなたLEVEL0だったの！？でもあの時、能力使ってたよね？」

「なんで？、というように愛は首を傾げた。

「俺の能力はちょっと特殊なんだ。能力名、黄昏使い《トワイライトマスター》光と闇の力を行使する、俺の生れながらの能力．．．．」

「あなた、原石だったのね．．．．．」

「じゃあ次は私の自己紹介、名前は暮咲 愛、常盤台中学二年、LEVEL5、能力は心理掌握。」

「え！？君、LEVEL5だったの！？」

お互いの能力について知った二人は内心かなり驚いていた。

「ところでさ、そのあなたって呼び方やめない？よそよそしいっていかさ、何かね。」

「う、うん、じゃあ類君って呼ぶね。」

「じゃあ俺は愛って呼ぶから。」

「ふえっ！？／＼／＼／＼」

愛は、いきなり類に名前で呼ばれ、頬を赤く染めていた。いきなり会ってまもない異性に名前で呼ばれたのだから、あたりまえである。

「ダメ、かな。」

「えっ！？」

類が愛に、子犬のような目線を向けてきた。

「い、いいよ！、愛って呼んで！！」

さすがにこんな顔をされると断るわけにもいかないだろう。

「わかったよ、愛。」

「あうう／＼／＼／＼／＼」

愛は再度名前を呼ばれ、さらに顔を真っ赤に染めた。

この風見 類という男（？）、意外と天然である。

「さてと、これからどうすr．．．うん？」

これからどうするかを愛に言おうとしたとき、隣の寮から火が出ていた。

（火事か？いや、でも煙が出ていないし、スプリンクラーも作動していない、とすると．．．．．。）

類がさつきまでとは違う、冷静な顔つきで、状況を整理し始めた。そして、一つの結論へとたどり着いた。

（能力者どうしの争いか！）

「火事かな？」

隣の寮から火が出ていたのを、愛も見つけたようだ。

「いや違う、多分あれは能力を使った時に出る火だ、俺がこれから止めに行く。」

「私も行く！」

「ダメだ、愛はここに残ってて。」

「イヤ、私だってこれでもLEVEL5、前みたいになにもできなくてただ見ているだけじゃ嫌だ！」

しばしの沈黙、そして．．．．．。

「はあ、怪我してもしらないよ?」

「大丈夫!」

「じゃあ……………いくよ!」

「うん!」

二人は急いで、隣の寮の6階へと急いだ。

第五話「物語のハジマリ」（後書き）

どうでしたか？

さあ、次くらいにはあの赤髪神父出せるかな？
感想、ご指摘、アドバイスお待ちしております。

報告！

修学旅行に行つてまいりました！

暑かったです．．．．．。

そんなことよりも、私が修学旅行に行っている間に、

心理掌握さんが漫画版「とある科学の超電磁砲」に出ていて

名前が食蜂操祈となっていました。

なので改変とともに、キャラの個性を見極めるために、

一時連載を休止します。

身勝手に申し訳ございません。

いつ連載を再開できるかはわかりませんが

また見ていただけたら幸いです。

ご指摘いただいたカモノハシさん、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9835t/>

とある魔術の黄昏使い -twairait master-

2011年10月9日08時14分発行